〈解答〉

1　1　ほころ　2　しんぎ　3　こうれい
　4　垂　5　専門　6　簡潔

2　1　（最初）雉の、（最後）多かり（完答）
　2　エ
　3　おのずから
　4　〔例〕卵が冷めないうちに温めるため。（15字）
　5　ア

配点　1、2 3は各1点、他は各2点　15点満点

〈解説〉

1

1　「綻びる」は「縫い目などがほどける」、「花のつぼみが少し開く」、「表情がやわらぐ」といった意味をもつ動詞。「綻」の音読みは「タン」で「破綻」などの熟語に用いられる。

2　「真偽」は「真実と、いつわり」という意味で、反対の言葉を組み合わせた熟語。「偽」の訓読みは「いつわ（る）」。

3　「恒例」は「いつもきまって行われること」で、多くの場合、儀式や行事について用いられる。

4　「垂」の音読みは「スイ」で、「垂範」「懸垂」などの熟語として用いられる。「垂」を使った故事に「垂涎の的（すいぜんのまと）」があるが、「思わずよだれを垂らすほど欲しいと思う食べ物」という意味から転じて、現在では「羨ましくて、何としてでも手に入れたいと思うもののこと」という意味で使われている。

5　「専」の訓読みは「もっぱ（ら）」、「門」の訓読みは「かど」。「専門」の「門」を「問」と書かないように気をつける。また「専」は、総画数が九画の漢字である。この漢字を書く時に、右上に点を付けないようにする。

6　「簡潔」は「簡単で、しかも要領を得ているさま」という意味で、対義語は「無駄が多くて、だらだらと長いさま」という意味の「冗長」である。

2

「発心集」は、鎌倉初期に成立した仏教説話集で、編著者は鴨長明。「発心」とは、悟りを得ようとする心を起こすことや、仏門に入ることを意味する言葉で、発心出家した人々のさまざまな機縁を述べた説話や、極楽往生を遂げた人々のさまざまな行いを述べた説

話などが中心となっている。

1　古文の会話文の終わりは「と言ふ」「と申す」「とのたまふ」などのように、ほとんどの場合「と」で受ける。本文の五行目に「とぞ」とあるが、これは「とぞ言ふ」の「言ふ」が省略されたものであり、その前の「多かり」までが会話文だとわかる。後は、そこからさかのぼっていき、会話文の始めを見つける。

2　傍線②を直訳すると「誰もが見ることだよ」となる。ちなみに、傍線②の文末にある「ぞかし」は、念押しする意を添える表現で、「……ことだよ」と口語訳する。

3　古文の中に出てくる「ぢ」・「づ」は、「鼻血（はなぢ）」、「縮む（ちぢむ）」、「三日月（みかづき）」、「続く（つづく）」といった現代語でも使われている場合を除いて、すべて「ぢ」→「じ」、「づ」→「ず」に直す。

4　傍線④の直前に「かれがさめぬほどに（＝卵が冷めてしまわないうちに）」とあることから、鶏の親鳥は、卵が冷たくなってしまわないように、急いで温めに帰るという内容でまとめるとよい。

5　本文の一～二文目に「母のあわれみ深さにまさるものはなく、それは人間だけではなく、鳥や獣の母親でさえも同じである」という内容が述べられており、ア「鳥や獣であっても、子どもに対する母親の愛情の深さは人間と同じ」と一致する。ちなみに、「過保護な母親」については本文には触れられていないので、イは不適当。また、ウは「鳥や獣の愛情の深さは人間にまさる」という内容で、エは「雉と鶏では鶏のほうが愛情にあふれている」という内容であるが、本文中には「人間よりも鳥や獣のほうが……」や、「雉よりも鶏のほうが……」といった比較はされていない。

〔大意〕

おおよそ情愛の深さでいえば、母親の（子どもに対する）思いにまさるものはない。（人間と比べると）愚かな鳥や獣であっても、（人間と変わらず）いつくしむ心を備えているものである。田舎の人が語りますことには、「雉が、卵を産んで温めている時に、野山の火災に見舞われてしまい、一度は（火に）驚いて飛び立つのだけれど、（巣に残してしまった卵を）やはり見捨てがたく思うからであろうか、煙の中に帰っていき、結局は（親鳥までも）焼け死んでしまう例が多い」と（いうことである）。また、鶏が、卵を温める様子は、誰もがきっと見たことがあるはずのことだよ。（鶏の親鳥は、卵と自分とが）毛で隔てられているのをあきたりなく思うのか、（自分の）胸の毛を自分で抜き取り、（卵を自分の）肌に押し当てるようにして、一日中、卵を温めている。餌を食べるために、自然と（卵のもとを）離れてしまっても、卵が冷めてしまわないうちに、と急いで（卵を温めに）帰って来るのは、並一通りの思いというものではない（＝きわだった情愛の深さであるといえる）。